

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 齊藤 毅

本論文は、ロシアの詩人オシプ・マンデリシタームの第2詩集『Tristia』について、主としてその主題構成の観点から分析・読解したものである。全体は2部に分かれ、第1部では、一冊の「書物」として『Tristia』がどのような主題によって構成されているかが論じられ、第2部ではいくつかの個別の詩編を詳細に分析することによって、第1部の主張を補強する、という構成をとっている。

マンデリシタームは20世紀ロシアを代表する大詩人の一人であり、特に1970年代以降の欧米における研究の蓄積は膨大であり、また最近ではロシア本国での研究の活性化にも目覚しいものがある。しかし、日本ではこれまでマンデリシタームに関する研究はごくわずかな散発的なものでしかなかった。本論文はマンデリシタームに関する日本で最初の本格的かつ総合的な博士論文である。

特に、『Tristia』という詩集をマンデリシターム自身が特別な意味をこめて考えた「書物」としてとらえ、「書物」全体としての主題構成を分析するというアプローチは先行研究の中にも前例があまりなく、本論文の独創的な点になっている。齊藤氏はそういった観点から、「故国的なもの／異国的なもの」の対比を基本的な軸として、革命、彷徨、冥府への下降といった様々な主題が詩集全体を構成していることを論証した。この結論を導き出す過程は、個々の詩篇テキストの緻密な読解とヨーロッパの歴史や文化の背景に関する幅広い調査に支えられており、十分な説得力がある。

審査の席上では、(1) 論文の構成に改善の余地がある、(2) 「国」や「共同体」といった概念についてより厳密な考察が必要ではないか、(3) 「書物」や「亡命」といった主題についてはさらに広いヨーロッパの文脈での検討も必要であろう、といった指摘も出たが、本論文が日本におけるマンデリシターム研究を国際水準にまで引き上げる画期的な業績として高く評価されるべきだということは、明らかである。よって審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するものとの全員一致の結論に達した。